

OCHADAI GAZETTE

お茶の水女子大学学报 第227号 2011年3月23日

OCHADAI GAZETTE Spring, 2011



お茶の水女子大学の新たな歩み 互いに磨きあい、ともに成長する場として

CONTENTS

TOPICS

- | | |
|--|--|
| 学長からのメッセージ・・・・・・・・・・ 1-2 | 附属学校園からのお知らせ・・・・・・・・ 7-8 |
| 学生のアクティビティ・・・・・・・・・・ 3-4
お茶大広報ガールズに迫る！ | キャンパス点描・・・・・・・・・・ 9-10
第61回 微音祭を開催
避難民学習教室「希望への旅」を開催
平成22年度奨学金授与式、
平成22年度学生表彰式がおこなわれました
秋の叙勲受章者(本学関係)について |
| 教員紹介・・・・・・・・・・ 5
田中琢三先生(大学院人間文化創成科学研究科) | |
| 卒業生紹介・・・・・・・・・・ 6
雨宮弘子氏(文教育学部地理学科卒) | |



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

学長からのメッセージ

Sapere aude! 自ら考える勇気をもて!

これはドイツの哲学者イマヌエル・カントが「啓蒙とは何か」の冒頭で、ホラティウスの書簡から引用し、啓蒙の標語としたフレーズです。

先行きが不透明な時代にあって、私たちは過去を踏襲するのでは解決できない多くの問題に直面しています。現代は人類が経験したことのない混沌の時代といえるのかもしれませんが。この蒙を照らし新たに途を啓くのは、自らが主体的に考え判断し、実行する勇気であるといえましょう。

日本のGDPが世界第二位の座を中国に明け渡し、経済情勢がかつてなく厳しい現在、国立の大学には多様な使命が課せられ、また期待も寄せられています。それは、社会資本の投下に見合った成果、つまり社会に資する人材を育成し、研究成果を上げることです。教育も研究も短期的にのみその価値を判断するのは適切ではないことを十分に認識しつつも、大学がどのような人間を社会に送り出そうとしているのか、大学での研究が人類にとっていかなるものであるのかを具体的に示すことも重要です。

お茶の水女子大学は女性のキャリア形成を重視した教育と研究を実践しています。2008年度に開始した21世紀型リベラルアーツ教育や2011年4月から開始する複数プログラム選択履修制度は

その一部です。ここでの人材育成の目標は、多岐にわたる現代の問題を専門的に分析し、解決の道を見いだす能力の習得です。それは技術的、専門的に高度な能力に加えて、主体的に思考し判断し、それを実行する能力を身につけることを意味します。

また、女性が活躍できる社会の構築に寄与することも国立の女子大学としての本学の使命です。そこで、2011年4月に全学組織としての男女共同参画推進本部を新設します。すでに2004年の法人化の際に女性支援室を設置し、

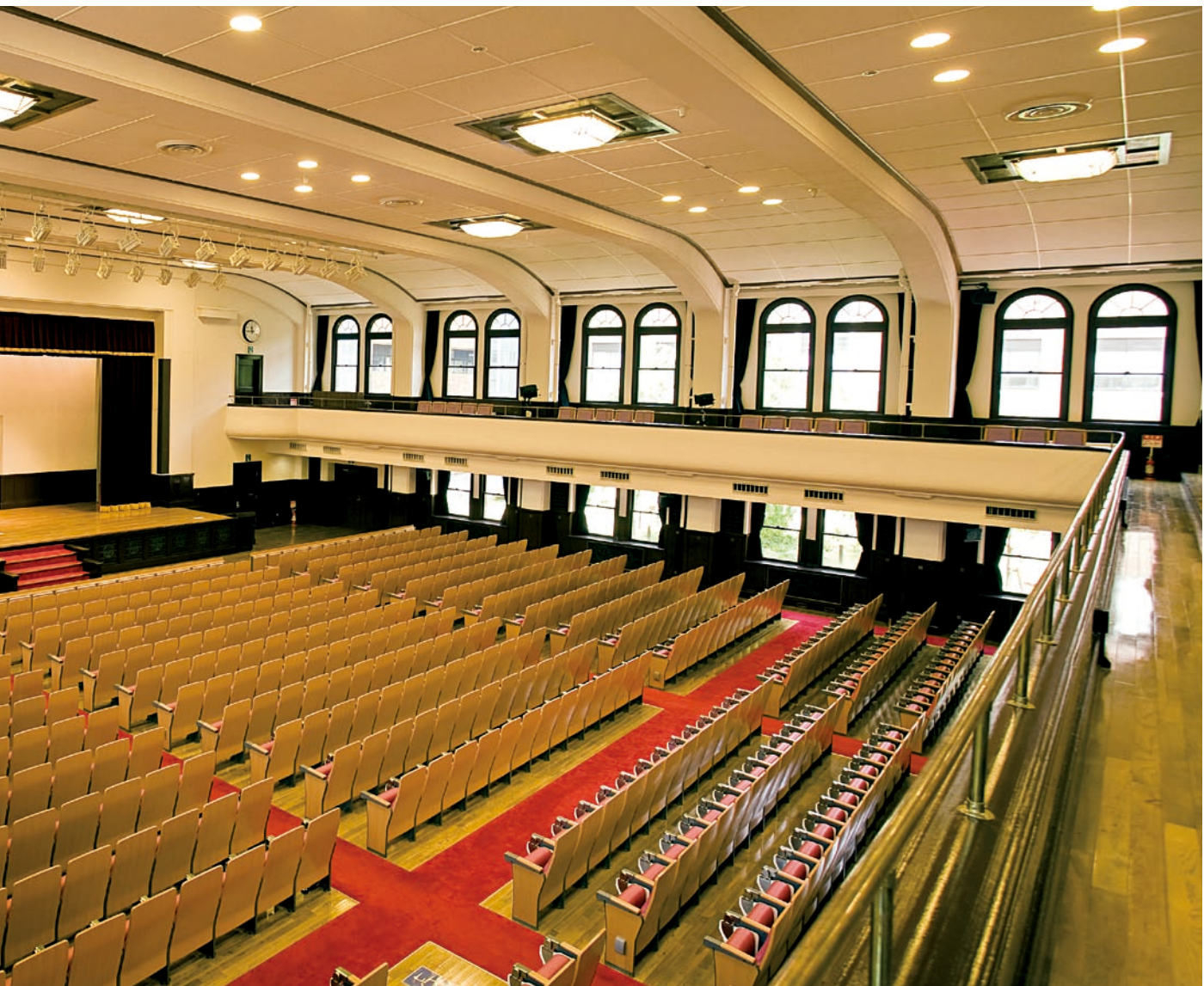


とくに女性研究者支援の取り組みでは、国内外の教育研究機関から注目され高い評価をいただいています。その理由は、135年間に亘る本学の歴史を通して多くの卒業生が社会的に活躍してきた実績と、その多様なモデルがあること、そして本学自身の働く場としての整備を目指してきたことにあるといえます。今後これらの成果を改めて検証し、広く社会に提案し、それによって潜在化している女性の能力発揮の場を拡大して男女共同参画社会の実現に寄与したいと考えています。

大学という教育研究機関の本質を見失うことなく、国立の女子大学として今求められていることに誠実に応えるべく日々努めてまいります。

この大学で学んだ知が全ての学生にとって、将来、自らの能力を発揮する礎となるに違いないと確信しています。その知を携えて、勇気をもって皆様が活躍されますことを心から期待しています。

2011年春 お茶の水女子大学長
羽入佐和子



学生のアクティビティ

お茶大広報ガールズに迫る！ 新お茶大グッズプロモーション活動、成功の裏側とは？



お茶大広報ガールズたち

2010年10月20日、新お茶大グッズの発売が開始されました。売れ行きは大変好調で、製造が追いつかず追加発注が行われているほどです。これほどの売れ行きを見せた裏側には4つの大きな理由が挙げられます。「お茶大広報ガールズ」によるプロモーション活動、プロのデザイナーによるシンプルでお洒落なデザイン、高品質ながらも学生が求めやすい価格、そして、大学グッズでは初めてとなる、教育分野での「寄附つき商品」であるということ。今回は「お茶大広報ガールズ」、寄附先であるルーム・トゥ・リード“Room to Read”について、皆さんにお伝えしたいと思います。

お茶大広報ガールズは、本学広報推進室の声がけで集まった、有志の学生によるグループです。学年・学部も様々な13人のメンバーは、新お茶大オリジナルグッズの誕生と販売を広報し、購買の促進を目的としたプロモーション活動を行いました。期間は10月の19・20・21・22日の4日間、昼休み。図書館前や共通講義棟2号館前の広場など、学生の集まる場所が選ばれました。

お茶大広報ガールズの活動に迫るため、メンバーの一人である、文教育学部言語文化学科2年・村田さちほさんに取材の協力をいただきました。

事前準備はどのような活動をされたのですか。

事前の活動として、まず、新お茶大グッズのポスターを作成するためのキャッチフレーズを考えました。例えば、寄附先になるルーム・トゥ・リードについて、どのような活動をしているのか調べたり、新お茶大グッズの見本を実際に手にとって、プロモーションブースのシミュレーションを皆で行うなどです。

私達お茶大広報ガールズは、「新お茶大グッズをなるべく

多くの学生に知ってもらうこと」、「ただのグッズでなく、購入することで寄附ができるので、世界の教育へ繋がる」と広報したい事柄が、メンバー内で明確であったため、とても活動しやすかったです。

キャッチフレーズとして決定した「つかえる、つながる」は、使いやすく、またグッズを使うことによって世界のどこかにつながるという想いを実感できるものになったと思っています。

では、実際のプロモーション活動についてお教えいただけますか。

グッズの販促は、お茶大広報ガールズが2グループに分担して行いました。その日の振り返りをメンバー全体のメーリングリストを使って共有したことで、日を重ねるごとに販促方法に工夫を凝らすことが出来ました。どうしたら目立つか、興味を持ってもらえるかを考えて、ポーチに化粧品を入れて使用方法を見せたり、どうやって「つかえる」のか、想像出来るように努力しました。

活動を振り返って、いかがでしたか。

今までこういった広報・プロモーション活動に携わったことがなく、またお茶大生にもそういった活動をしている人がいなかったのも、活動当初は不安でした。しかし、絶え間なくアイデアの飛び交うお茶大広報ガールズというチームの意欲の高さに刺激・圧倒され、自分自身も積極的に活動に参加することが出来ました。キャンペーン当日はチームが一丸となって迎えました。私達が想像していたよりもはるかに多くの人に見ていただくことができ、4日目には「買いました」と声をかけてくれる人もいて、胸に達成感が押し寄せてきました。



プロモーションブースの様子



お茶大グッズを知ってもらい、購買を促す目的で結成されたお茶大広報ガールズ。始まりこそ広報推進室からの声かけでしたが、活動はメンバー自身の積極的な行動によって行われました。

活動に参加された他のメンバーの感想には、「今までは、消費者の立場でしたが、逆の立場にたってみると、これまで見えなかったものが沢山見えるようになりました」、「同じ商品でも、伝え方や見せ方一つ、チラシを配る時の言葉や態度

一つで、お客様への伝わり方が大きく変わることを実感しました」、「普段の大学の授業では学ぶことのできない、実践的な学びがたくさんありました」など、普段は関わることがない学部間の交流、また販売者としての立場での広報活動を考えるなど、新たな気づきが得られた人も多いようです。

お茶大生には、内部からも外部からも、「真面目なだけで、実際の行動は大人しい」といったようなイメージを持たれることがあります。けれど実際は、聡明な頭脳・アイデアがあり、またそれを活かす力も行動力もあります。今回の広報活動は、そんな可能性を存分に発揮するよい機会となりました。広報活動の内容も、工夫を凝らした素晴らしいものになりましたが、結果としての売上も、追加発注が何度も必要なほどになっています。

学生記者である私自身も、この活動の取材を通して大変励まされました。これからも、このような機会に積極的に参加し、自らの可能性を引き出し、能力を伸ばし、それらを学生同士で還元しあうお茶大生が増えることを楽しみにしています。

文責：横山美鶴（学生団体 D-cha 新聞部 1 年）
写真：相原佳香（お茶大広報ガールズ リーダー）

ROOM TO READ

Room to Read—読むための部屋、余裕。本を読むこと、すなわち学ぶということです。世界にはなお、読み書きが出来ない人が7億7千人もおり、また、学校に行くことができない子どもたちが、1億人にのぼります。

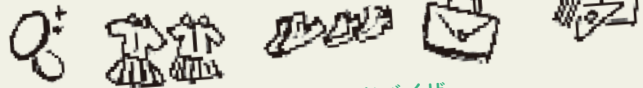
ルーム・トゥ・リードは、アジア、アフリカなどの開発途上国において、彼らの教育の手助けをする NGO です。この活動は、マイクロソフトの重役であったジョン・ウッドがネパールの学校に図書を寄附したことから始まりました。今では、学校や図書館などの施設を建設したり、現地語児童書を出版したり、少女が学校に通えるよう女子教育支援プログラムを提供するなど、様々な方法で教育の機会を提供しています。教育は、子ども達にとって生涯の贈り物になります。そして子どもは将来の希望となるのです。

ルーム・トゥ・リードの活動に興味を持った方は是非 HP を訪れてみてください。

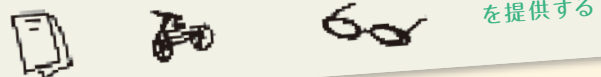
URL : <http://www.roomtoread.jp/>

ルーム・トゥ・リード 女子教育支援プログラム

学費 + 制服2着 + 靴2足 + 通学鞆 + 学用品 +



健康保険 + 自転車 + 女性アドバイザー



を提供する

女性の教育について

多くの途上国では、文化的偏見と社会の歴史から女性は虐げられ、教育の機会も男女平等ではありません。そうして育った男性は女性に対して偏見を持つようになり、また、女性自身も子ども達にあやまった偏見を伝えてしまいます。逆に言えば、女性が教育を受けることで、より多くの収入を得られるようになり、経済的な自立が可能になります。ひいては、男女双方の意識を変えることに繋がるのです。

また国連は以前から、少女の教育は他のどのような取り組みより大きな影響を途上国にもたらすと提唱しています。

教員紹介

ご自身の研究や教育観を語っていただく「教員紹介」。今回は今年度4月に着任された大学院人間文化創成科学研究科文化科学系助教の、田中琢三先生にお話を伺います。

田中先生は、学部では文教育学部言語文化学科、大学院では比較社会文化学専攻にご所属で、フランス文学・フランス文化・フランス語などを講じていらっしゃいます。

ご出身は？ ご専門は？

兵庫県加古川市です。フランス文学、ことにエミール・ゾラの作品を研究対象としています。

フランス文学を研究されるようになったきっかけは？

本を読むのはこどもの頃から好きで、井上靖などよく読んでいましたが、高校生くらいまで格別フランス文学が好きだとかいったことはありませんでした。高校のときの国語の先生が「東大に行くなら仏文だ。すごい人材を輩出している」と言われたのが強烈で、東大仏文への夢やイメージがふくらみ、とうとう東大へ、仏文へと針路をとってしまいました。大学に入ったときは、フランス語をただの一語も知らなかったんです。大学に入ってから、ゾラの『居酒屋』に感動したことが、ゾラを研究対象とするきっかけになりました。胸をしめつけられるような悲惨さを迫真的に描いており、徐々にクライマックスへと向かう構成力のみごとさに、圧倒される思いでした。

フランスに留学され、フランス語で学位を取得されたのですね

5年間をパリで過ごしました。フランス語は発音がむずかしいですし、教科書には載っていないような俗語が、実際の会話ではたくさん使われています。ユーモア・ジョークなど、文化に根差したものはニュアンスがよくわからなくて、むずかしいですね。そんなことに苦労したり、地下鉄でスリに財布を盗まれたり、緊張感をもって過ごしていました。でも食事はおいしいし、絵画も映画もとても安く見ることができ、芸術



に触れるのには本当に恵まれていました。大家さんと家賃の交渉をする必要に迫られて、微妙なニュアンスを伝える技術を身につけたような気がします。フランス語で考え、フランス語で書いて、ソルボンヌ大学で学位をとりました。

どのようなことを研究されているのですか？

ゾラを研究対象としてはいますが、ゾラが大好きでのめりこむといったことではなく、むしろ客観的な好奇心が私を動かしているように思います。ゾラの思想・イデオロギー・人生哲学に関心がありますし、またゾラを通して、フランス社会はどのようになっているのか、どのような特色があるのか、社会と文学はどのように関わり合うのか、小説は政治とどのように切り結ぶのか、そのようなことに関心をもって研究を進めています。かつてに比べてフランス文学の人气が落ちてきていますが、それは政治との関わりが希薄になったからではないか、と個人的には思っています。文学の勢いを盛り返したいですね。

ゾラの決定論にも関心があります。その遺伝観はキリスト教の原罪の概念ともつながり、性悪的な色彩が強いのですが、そのゾラも晩年になると理想主義的に変化していき、社会主義と結びついたユートピアを志向するようになります。こうした変化も、研究の対象としていきたいです。19世紀の終わりから20世紀初めのフランスは、宗教・政治・文学の問題が渾然一体となっています。そこがおもしろいところでもありますね。

フランスではフランス人の視点に立って、フランス人的に思考しないと、研究として認められませんでした。つまりそれは、フランス人でも書けるようなことを書いたのだ、ということだとも言えます。今思うことは、これからは日本人でなければできないような、日本語や日本文学や日本文化をわかっていなければならないような、そういうフランス文学研究をやりたいと思っています。

オジドリ夫婦でいらっしゃるとか

妻と二人暮らしをしています。妻と一緒にフランス留学をして苦楽をともにした友人の、妹なんです。友人もすぐそばに住んでいて、当時のフランス仲間と日頃も親しい交流をしていま

す。最近健康のためにスポーツジムに入りました。妻と一緒にランニングをしたり、水泳をしたりしていますよ。

お茶の水女子大学の学生について、ご感想を

お茶の水女子大学に着任する前は、いくつかの大学で非常勤講師をしていました。着任して仏文コースの3・4年生の最初の授業で、ものすごい衝撃を受けました。「どうしてこれほどフランス語ができるんだろう……」今まで教えていた大学では決して出てこなかったような、核心を突いた鋭い質問が出ますし、発音もきれいですし、びっくりしました。そもそも私語など全くなく、黙って授業を聞いてくれること自体が驚きでした。真面目にノートをとり、とてもやる気があります。

コア科目のフランス語でも、そんなに教えないうちから発音もきれいにできるようになるし、教えてないことまで勉強してきます。まだ1年生なのに「フランス語でサルトルを読めるようになりたい」と言った学生がいて、そんなことは今までの大学ではあり得なかったことですから、本当に嬉しかったです。この大学に来られてよかったです、心から思いました。

お茶大生へのメッセージをお願いします

大学で学ぶべきことはしっかり学んで、社会で生きていくために必要な考える力や、選択して判断する力を身につけてほしいと思います。それは技術や資格などといったことではありません。大学で学ぶべきものは、思考力・自己決定力です。いろいろな授業を受けてみて、勉強や発表を通じて、サークルや友人関係などを通して、自分の知らなかった自分の能力に気付いてほしいと思います。それは余裕のある大学時代のうちに、ぜひやってほしいことです。

研究も仕事も生活もすべてひっくるめて、一番大事なのは誠実さだと、私は思っています。自分に対しても他人に対しても偽らないこと。それに尽きると思います。

文責・写真： 荻原 千鶴
(大学院人間文化創成科学研究科文化科学系 教授)

卒業生紹介

今回お訪ねしたのは1983年文教育学部地理学科卒の雨宮弘子さんだ。東京電力労務人事部ダイバーシティ推進室長として、2006年から女性活用の旗振り役として最前線で活躍している。

東電は、社員数3万8300人。うち、女性は4652人で約12%を占める。充実した両立支援制度もあって、女性の勤務年数は平均約17年と長い。しかし、一方で女性の管理職への登用は少なく、多様化する消費者ニーズや激化する市場競争に対応するために、具体的な施策が会社として急務となっていた。

東電初代ダイバーシティ推進室長に

そんな時、白羽の矢がたったのが、当時、米系化粧品会社エイボン・プロダクツで、パシフィックリージョン・セールスディレクターをしていた雨宮さんだ。初代ダイバーシティ推進室長のポストをオファーされた雨宮さんは、交渉にあたった担当者にこう尋ねた。「社員の殆どが日本人の会社で、どんなダイバーシティに取り組むのですか？」というのも、20年間勤めたエイボンでは、ダイバーシティといえば、主として外国人との付き合い方だったからだ。マーケティング部門で日本市場向けの製品を開発するときは、嗜好、商習慣、文化的背景が異なるアメリカ本社と粘り強く交渉してさまざまな壁を乗り越えてきた。一方で、エイボンでは男女差は全くなかった。個性的で輝くロールモデルも周囲に沢山いた。

外資系企業からの転身

外資系企業から保守的で固いイメージのある東電への転職。誰もが驚いた。「あんなに苦労してマスターした英語を捨てちゃうの？」と言った友人もいた。雨宮さんの背中を押したのは、「前任者がいないポストなんて面白そう!」という持ち前の好奇心だった。エイボンで、扱う分野を数字・製品・人と、社内異動の度に変えてきた雨宮さんにとって、ダイバーシティという新しい分野に飛び込むことに躊躇はなかった。多様性の推進という、会社にとって未知のエリアだからこそ、外部の未知の人に任せようという東電の期待に答えて、雨宮さんはこれまで誰もやらなかった新しい取り組みを次々に提案していく。わからないときは、先進的な他企業の担当者に話を聞きにいった。

実践的なマネジメントスキルを重視した女性管理職候補者研修、若手育成プログラム、育児

あめみやひろこ 雨宮弘子さん プロフィール

東京電力株式会社 労務人事部
ダイバーシティ推進室長

1983年お茶の水女子大学文教育学部卒業。ポーラ化粧品本舗勤務を経て、1985年外資系化粧品会社エイボン・プロダクツ株式会社入社。マーケティング・営業を経験し、トレーニング部長、人事総務部長、パシフィックリージョン・セールスディレクターを歴任。2006年から現職。キャリアカウンセラー（日本キャリア開発協会認定 CDA）



休職者の復帰支援などを実施しながら、男女ともに社員の意識啓発に継続的に取り組む。なかでも、2008年に策定した「業務付与ガイドライン」は、社内のすべての仕事を洗い出し、性差で仕事内容に差別が生じていないかをリスト化し、偏りがあれば改善を促すという画期的なものだ。

活躍の場を求めて

聡明そうな眼差しと理知的な話しぶりなのに、人を包みこむようなオーラがある雨宮さんは、社会学系の勉強がしたくて、都立高からお茶大の地理学科に進んだ。大学時代は、茶道部とフィギュアスケート部に所属。とりわけ、茶道は週2日の稽古に通うほど熱心に励み、30年経った今でも、大学時代に基礎を仕込んでもらったお陰で、一生の趣味を得たと感謝している。

卒業後は、女性が腰掛けでなく長く働ける会社に就職したいと思ったものの、当時、文系の大卒女子の募集など殆どなかった。たまたま求人あった3社を受けて、ポーラ化粧品へ入社。お茶汲み、コピー取り、手書きの清書などの業務を淡々とこなす日々。転機は、2年半後にやってきた。友人が外資系に転職。男女差がないと聞き、それなら私もと、新聞の求人欄で見たエイボンに応募し、数字に強い人という条件を見事クリアして採用される。

キャリアの転機のつかみ方

キャリアの転機には2つある。自分から動くときと、人から話があるときだ。雨宮さんは、そのふたつを巧みに活かしてきた。一回目の転職、そして、エイボン入社3年目には、社内公募に自ら手を挙げて製品企画の部署に異動した。

同時に、「評価は他者がするもの。やってみ

なければ良さも苦しさもわからない」と、与えられた機会をチャレンジにつなげる柔軟性と謙虚さも忘れない。

「若い時は、限られた情報を基に、自分の思いやこだわりで固執してしまいがち。自分に向いていないと思っても、やってみると潜在能力に気づき、道が拓けることもある」というのは、これから社会へ巣立つ学生への雨宮さんからのメッセージだ。

CSR（企業の社会的責任）について朝日新聞文化財団が2003年度に行った調査で「登用実績の男女平等」は最低ランクと評価された東電は、今年、均等推進企業部門で厚生労働大臣優良賞に輝いた。ダイバーシティに関しては後発組だった東電を、男女問わず誰もがチャンスと支援を平等に受けられる職場にしよう、雨宮さんは今日も模索しつつ、確実にその活動の裾野を広げている

文責：坪田秀子（学長特命補佐）

わたしのオフタイム
4年前から飼いだめた2匹の愛犬と遊ぶのが何よりの楽しみ。週末は、ご主人と連れだって、老後に住むつもりで伊豆高原に建設中の家を見に行く。ゆくゆくは、そこでドッグカフェを経営するのが夢だ。好きな言葉は“Nothing too late”。明日の私より、今日の私は一日若い。新しいことはいくつになっても始められる。

附属学校園からのお知らせ

附属高等学校便り

「輝鏡祭：体育祭、文化祭、ダンスコンクール」

生徒の自治会主催のビックイベントは5月の体育祭、9月の文化祭、10月のダンスコンクールを総称して「輝鏡祭」と呼びます。この名称は1974（昭和49）年に全校生徒のアンケートから選ばれたものです。「輝鏡祭」の「鏡」は校章にもなっている八稜鏡に由来しており、同時に「生徒ひとりひとりの輝きを集結した祭り」という意味も込められています。今年の統一テーマは「茶美ing（チャミング）」です。

体育祭は1年から3年までの縦割りの蘭・菊・梅の3チームで、競技・応援に熱い戦いが繰り広げられます。今年度は5月29日に行われ、混戦の末、梅組が2連覇を達成しました。

文化祭はクラス、クラブ、有志、個人と様々な参加形態があり、1人の生徒がいくつも掛け持ちをしながら、もっともエネルギーを注いでいるイベントです。9月19・20日の2日間で約2700人の来場者があり、大いに盛り上がりました。

輝鏡祭の最後を飾るダンスコンクールは、戦後間もない1948（昭和23）年に始まり、今年度で61回目を迎える本校伝統の行事です。1・2年の6クラスが、それぞれ設定したテーマに沿った10分弱のダンスを創作し、クラス全員で踊るコンクールです。衣装もオリジナルなものを自分たちで作成します。審査は、3年生と教職員からなる校内審査員とダンスの専門家である特別審査員の



評価を総合して行います。10月27日に行われた今年度の各クラスのサブテーマは次のようでした。1年蘭組「小さな魚の大きな冒険」、1年菊組「Beauty of Love」、1年梅組「源氏物語～栄枯盛衰恋物語～」、2年蘭組「森のくまちゃん」、2年菊組「宣戦布告」、2年梅組「ガラスのピエロ」。優勝は2年菊組、準優勝は1年蘭組が2年生を押さえて入賞しました。

ちなみに昨年度は60回記念大会として、かつて伝統的に踊られていたファウストを、卒業生・在校生の有志で再現しました。

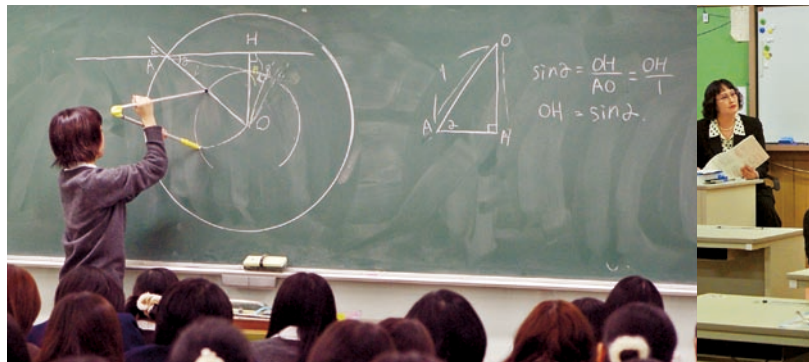


公開教育研究会「高大連携特別教育プログラム」

～新学習指導要領に向けて～

次に本校の教育研究活動の一端をご紹介します。本校では大学と連携して「女性の能力開発」モデルの考案を企図し、基礎・基本に根ざした教養の涵養を目的とする「高大連携特別教育プログラム」を2005年度からスタートさせています。プログラムは次のような内容からなっています。

1. 「教養基礎」：国語・数学・英語の3教科について既存の高等学校における教科教育を基本線に、高校、大学の教員の連携・協力により実施する学校設定科目。
2. 公開授業：高校の2・3年生の希望者が放課後の時間を利用して受講する、大学が附属高校生に開放する入門的内容の科目。
3. 「選択基礎」：高校3年生対象に大学教員が担当する、生徒志望専門分野の基礎教育を中心に行うプログラム。
4. 高大連携特別入試：特別教育プログラム履修生の追跡調査のために行う附属高校生対象の特別選抜制度。
5. キャリアガイダンス：高校1・2年生対象に大学教員が行うキャリアガイダンス、生徒の希望する研究室訪問及び大学教員との懇談。



今年度の公開教育研究会は、11月20日（土）、この高大連携特別教育プログラムをテーマに開催しました。当日のプログラムは、教養基礎「国語」、教養基礎「数学」の公開授業、教養基礎「英語」の研究発表、3教科の教科別研究協議、人間発達教育研究センター吉武尚美さんによる調査報告、耳塚寛明副学長による「高校と大学 どう接続するか」と題した講演で、学内の先生方を始め、全国の高校・大学の先生方に、日頃の研究の一端をご覧いただき、たくさんのご意見をいただくことができました。



附属学校園での出来事 (2010年10月～2011年1月抜粋)

【いずみナーサリー】

10月

- ・栄養教育学研究室の学生による手洗い指導
- ・子どもプロジェクトとの研究会
- ・「一人一人の発達、育ちを見守り、十分に遊びこめる環境をつくる」事例研究
- ・保育臨床実習
- ・親子で遊ぼう会、お父さんの会
- ・保護者会
- ・避難訓練

11月

- ・保育参観(学生会館前広場)
- ・保育参観(学生会館前広場)
- ・附属の保護者対象室内開放日

12月

- ・避難訓練
- ・お楽しみ会
(学生ボランティアがおやつ作り・楽器演奏)

1月

- ・社会人特別講座 観察実習
- ・附属高校家庭科授業参加
- ・公開保育講座
おもちゃの美術館館長 多田千尋氏

【附属小学校】

10月

- ・セキュリティ講習会、連携研究日
- ・かがみ会バザー
- ・避難訓練
- ・郊外園活動さつまいもほり(4・5年生)

11月

- ・德音祭(4年生がオペラ出演)
- ・音楽会
- ・避難訓練

12月

- ・上学年マラソン大会
- ・終業式

1月

- ・始業式
- ・委員会活動(5・6年)
- ・研究開発学校フォーラム
- ・避難訓練
- ・茗鏡会ニューイヤーコンサート

【附属高等学校】

10月

- ・2学期中間試験
- ・3年学カテスト
- ・ダンスコンクール

11月

- ・1年農場実習・サツマイモ収穫
- ・3年学カテスト
- ・保護者授業参観日
- ・相互授業見学週間
- ・1年梅組農場実習
- ・公開教育研究会

【附属幼稚園】

10月

- ・5歳児 芋掘り
- ・4歳児 親子で遊ぶ日
- ・3歳児 遠足
- ・誕生会
- ・お茶の市(PTAバザー)

11月

- ・創立記念の集い(ロバの音楽座)
- ・創立記念日

12月

- ・お餅つき
- ・誕生会
- ・終業式

1月

- ・始業式
- ・鏡開き(お汁粉パーティー)
- ・誕生会
- ・親子体操の会
- ・5歳児園外保育(科学博物館)

【附属中学校】

10月

- ・後期開始
- ・始業式
- ・研究授業
- ・芸能鑑賞会(午後)(アリーナ特設ステージ)
- ・1年郊外園

11月

- ・3年学カテスト④
- ・任命式(6校時扱い)
- ・避難訓練
- ・公開研究発表会
- ・1年生校外学習(横浜)
- ・3年生中間テスト

12月

- ・マラソン大会、保護者会
- ・益川先生講演会
- ・全校集会
- ・冬休み開始

1月

- ・冬休み終了
- ・保護者参観日

12月

- ・2学期期末試験
- ・進路講演会(2年)
- ・キャリアガイダンス(1年全員+2年希望者)
- ・球技大会
- ・中学生向け理数体験授業
- ・シェファー先生特別授業
- ・益川先生講演会
- ・人権研修会(2年)
- ・終業式

1月

- ・始業式
- ・2年学カテスト、保護者会
- ・1年学カテスト、保護者会



附属学校園からのお知らせ

キャンパス点描

第61回 徽音祭を開催

「立てば芍薬 座れば牡丹 踊る姿はお茶の華」

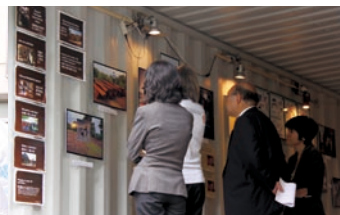
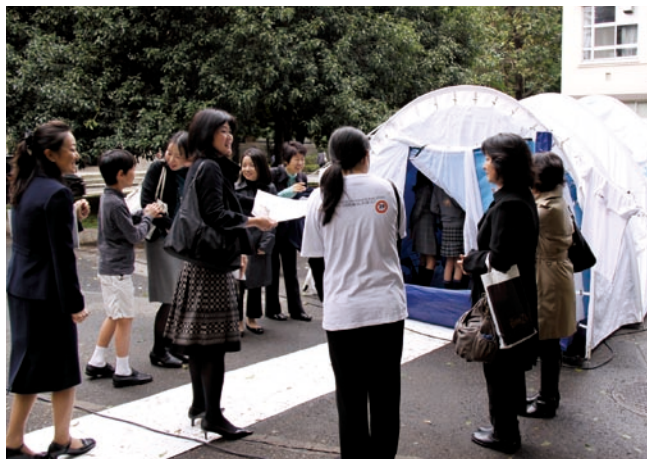


2010年11月13、14日の2日間にわたって第61回徽音祭が開催されました。

今年の徽音祭のテーマは「立てば芍薬 座れば牡丹 踊る姿はお茶の華」。快晴のなか、工夫が凝らされたサークル模擬店のほか、アーティストによるライブやHigh Quality クイズバトルなど特設ステージでのイベントが催され、13,000人以上の方々に来場いただきました。

避難民学習教室「希望への旅」を開催

— お茶の水女子大学〔国際支援活動強化月間・国立大学フェスタ 2010〕 —



お茶の水女子大学では、2010年10月を「国際支援活動強化月間」（国立大学フェスタ2010）と定め、これに併せて一般財団法人国際難民支援会（RIJ）の難民支援活動に協力し、2010年10月31日、移動難民学習教室「避難民たちの体験 —希望への旅—」をお茶の水女子大学キャンパスにおいて開催しました。

このイベントは、国際連合難民高等弁務官事務所（UNHCR）の協賛のもと、避難民の直面している問題を肌で感じ学んでいただき、国際的な避難民問題に

対する関心を高めることを目的として、移動型の輸送用コンテナ（20フィート）を利用した難民支援活動写真展のほか、UNHCRの避難民用テントの展示、学生たちによる避難民の生活体験の実演などがおこなわれました。

当日は台風の影響がありましたが、小学生やその保護者の方など多くの方々にご参加いただき、普段目にするのが少ない避難民の実状について知っていただくことができました。

平成 22 年度奨学金授与式、 平成 22 年度学生表彰式がおこなわれました



奨学金授与式では、本学独自の奨学金のうち「保井・黒田奨学金」、「被服学奨学金」、「食物学奨学金」、「家庭経営学奨学金」、「大学院研究科奨学金」、「池田摩耶子記念奨学金」、「湯浅年子記念特別研究員奨学金」、「数学奨学金」、「生物学優秀学生奨学金」、「化学科（宮島直美）奨学金」、「育児支援奨学金」について、寄附者の方々や指導教員が見守るなか、受賞者に奨学金が授与されました。

また、学生表彰式では、学業及び学術研究活動において、特に顕著な業績を挙げ、かつ、学界又は社会的に高い評価を受けた学生などを対象に、その業績を称え、羽入学長より表彰状が贈られました。

2010 年 11 月 26 日、平成 22 年度奨学金授与式、および平成 22 年度学生表彰式がおこなわれました。

秋の叙勲受章者（本学関係）について

2010 年 11 月に秋の叙勲受章者の発表がありましたが、本学からは下記の方々を受賞されました。

瑞宝中綬章

田中 翠 お茶の水女子大学名誉教授
森 隆夫 お茶の水女子大学名誉教授

瑞宝小綬章

佐竹 元吉 お茶の水女子大学
生活環境教育研究センター客員教授
(元国立医薬品食品衛生研究所生薬部長)



表紙 第61回微音祭

裏表紙 平成23年度学部入試(前期)

お茶の水女子大学学报 第227号

▽発行日：2011年3月23日

▽発行：国立大学法人お茶の水女子大学

東京都文京区大塚 2-1-1 (〒112-8610)

ご意見・ご感想はこちらまで

学術・情報機構広報チーム

電話 03-5978-5105

FAX 03-5978-5545

E-mail : info@cc.ocha.ac.jp

URL : <http://www.ocha.ac.jp/>